
近衛家の魔眼持ちの錬金術師

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近衛家の魔眼持ちの錬金術師

【Nコード】

N5081W

【作者名】

暇人

【あらすじ】

俺は神が引いたくじによって死に、ネギま！の世界に転生することになった。能力は様々な魔眼と錬金術、剣術。名字は近衛。どうやら木乃香の双子の弟らしい。まあ、原作介入しながらのんびり過ごしますか。この作品は作者の処女作です。駄文です。キャラ崩壊が激しいと思います。ご都合主義も満載です。また、作者は原作を持っておらず、原作知識は他の作者様の作品から得ております。ご了承ください。それでも大丈夫な人はどうぞ。

第1話（前書き）

駄文です。初投稿です。短いですが、それでも良ければどうぞ。

第1話

さて、唐突だが、俺の目の前にはなぜか頭をポリポリ掻いている爺さんがいる。

俺は本屋で立ち読みしてたはずなんだが…

まず、この爺さん何者だ？

「神じゃが？」

はい？神？ていつか今心を読んだ？

「神じゃからな」

うん、この人嘘ついてるわけでもなさそうだし、ホントか。

「なら、なぜここに俺はいる？」

「死んだからじゃな」

はい、テンプレきたこれ。でもなして俺？

「くじじゃ」

どうやら俺はくじで死んだらしい。

まあ、前世での思い残しなどないがな！

「暇つぶしにお前には能力持って転生してもらおう。まあ、時間停止とかは無理じゃがな」

「なら、ハガレンの錬金術と錬丹術を手合わせ方式で。後、NARUTOの写輪眼、輪廻眼、白眼。あ、万華鏡は失明なしで。後は、伝勇伝の殲滅眼、複写眼と空の境界の直死の魔眼。残りは、身体能力を禁書目録のアックアと同じ二重聖人並で。それと全世界の剣術、

完全に扱えるように。最後に影の倉庫と発火布の手袋を防水仕様で
ま、こんだけありやまず負けん。

「少しは自重せんか、全く。ちなみに行くのはネギま！の世界じゃ。
抑止力は働かないから安心するように」

「んじゃ早く転生さしてくれよ」

「まあまで、鍛えなければせつかくの能力もただの力の持ち腐れじ
やるつ？」ここで修業していくがいい」

「ん〜、急いでるわけでもないし、いつか。んじゃ10年ぐらいよ
ろしく！」

さあ、修業を始めようか。

「10年後」

ふむ、大体は能力を操れるようになったな。これなら大丈夫だろう。

「おい神！」

「なんじゃ？」

「俺はそろそろ行きたいのだが」

「ふむ…、よかろう、行って来い。次の体でも同じように能力は使えるからの。」

「恩に着る。じゃ、行ってくるわ」

「じゃ〜の〜」

そこで俺の意識は途切れた。

第1話（後書き）

やっぱり書くのは難しいですね…

感想お待ちしています。でもただの罵倒はおやめください。

第2話（前書き）

駄文&ggdggdです。それでもよければどうぞ。

9 / 9 大幅修正しました。

9 / 10 主人公の名前を修正しました。

9 / 24 修正しました

第2話

さて、俺が転生してから早4年がたった。

今の名前は近衛香樹だ。

このえいこうき

そう、ネギま！に出てくる近衛木乃香の双子の弟として俺は生まれ
たらしい。

そして、今日は父親である詠春に紹介したい人がいると姉弟呼び出
された。

「さて、木乃香、香樹、入ってください。」

父親である近衛詠春に呼ばれ入ると、そこにはおそらく同年代であ
るう少女がいた。

「刹那くん、自己紹介を」

「さ、桜咲刹那です！」

「近衛木乃香や。このちゃんてよんでな！せつちゃんてよんでもい
い？」

「近衛香樹だ。俺は呼び捨てで」

「こ、木乃香様に香樹様ですね！よろしくお願いしましゅ！あ、あ
う……」

あ、噛んだ。顔真っ赤だ。かわいいなあ。

「様づけはやめてくれるか？ 堅苦しいのは嫌いだな。後敬語もやめてくれると助かる」

「わ、わかり…じゃなくて、うん！」

「ほないこか、せつちゃん」

そして木乃香は刹那と遊びに行った。

(しかし、今の子…)

魔眼発動。

刹那を視る。

(なるほど、この子人間と烏族のハーフか。)

後で少し話しておくか…

side out

刹那 side

今日は香樹くん呼び出された。

一体何があるんやろか…

言われた場所に行くですでに香樹くんがいた。

「お、来たか。場所移すぞ」

そういつて山へ入っていく。どうしたんやるか…

だいぶ歩いた後、突然香樹くんが振り返った。

「刹那、お前ただの人じゃないだろ？」

え！？なんでそれを！？翼も見せたことないのに！？き、嫌われて
まう！

「嫌いやせんよ。木乃香に言つつもりもないし、お前が人外なら、
俺も人外だ。何せ…」

そういつて香樹くんは目を閉じ、近くの大木に向かって構えた。

「こんなことができるからな」

バキッ！

うちは目の前で起きたことが信じられなかった。

何せ、四歳の力ではまず折れないはずの木を、気の強化もなしに素手で叩き折ったから。

「ちなみにお前の正体を見破ったのは魔眼だ」

そういつて香樹くんが目を開くと、その瞳には五芒星が浮かんでいた。

「お前が裏に関わってるなら教えたくてな。ちなみにこれを知るのは父さんだけだ」

「でも、なんでうちに…?」

「何、俺の初の友達だしな」

「それだけで…」

でも、うれしい。うちが人じゃないと知っても、嫌わなかった。うちはこの人だったら…と思い翼を出す。

「これがうちの正体です。」

うちの、白い翼。禁忌とされた、その翼。それを見ても香樹くんは顔色一つ変えずに、こういった。

「きれいだな。天使みたいじゃないか」

嬉しかった。うちのこの翼を見ても、まったく驚いた様子を見せない。ただ褒めてくれた。

そして、その日は互いの事を秘密にすると約束して、家に帰った。

＼side out＼

＼香樹side＼

さて、刹那と互いの事を教えあってから、早半年が過ぎた。

「さて、と」

俺は現在、とある刀を錬金術で作成しようとしている。

「せーの！」

錬金し、完成したその刀を見る。

作った刀の名は…

「できた。斬刀・鈍」

つくっちゃいました。でもこれでやっと零閃ができる。今まで他の

刀で試してみたけど全然だめだったんだよな。

さて、試し切りに行くか…と思った矢先、ふと思った。

木乃香、確か川でおぼれなかったか？

確か今日は、川で遊ぶと言っていた。となると…

俺は全速力で駆け出した。

川に行くと、予想的中。木乃香が川で溺れていた。

「チィ！」

俺は聖人の身体能力を使い、川から木乃香を救い上げた。

息はある、無事なようだ。

「このちゃん！香木くん、このちゃんは!？」

刹那が駆け寄ってきた。

「とりあえずは無事だ。早く屋敷へ連れて行くぞ。」

そして俺は屋敷へ駆け出した。

どうやら木乃香は問題ないようだ。
しかし、刹那の落ち込み様が気になる。

「刹那、今大丈夫か？」

部屋に入ると、刹那は部屋でうずくまっていた。

「気に病むな。お前はまだ4歳だ。できないことのほうが多い。少しは周りに頼れ」

「でも……」

「でもクソもねえ！とりあえず木乃香は無事だった。これで万事解決。それでいいじゃないか」

「……」

「うちは気になんかせんよ」

「木乃香！？」

「このちゃん大丈夫なん！？」

「うちはもう大丈夫やえ。せっちゃんも気にしたらいかん。せっちゃん
のせいやないんやから」

「1」のちゃん…」

「また一緒に遊ぼ？」

「……うん！」

（これでいいか）

そして俺はその場を後にした。

第2話（後書き）

感想お待ちしております。罵倒はお控えください。

なんかすでにお気に入りに登録してくださっている方が20人以上もいるんですが…

こんな駄文を登録してくださって本当にありがとうございます。

第3話（前書き）

相変わらずの駄文です。ツユリ様、ポツポ様ご感想ありがとうございました！

ではどうぞ

9 / 10 主人公の名前を編集しました。

第3話

さてみなさん、近衛香樹だ。

ただ今、山で木乃香を誘拐しに来た黒づくめの男×10に囲まれております。

実は転生してから人を殺したことがなかったりする。

木乃香はこいつらが来る直前に屋敷に戻らせたので目撃される心配はない。
だから、最近作った新技の実験台になってもらおうと思う。

「木乃香嬢はどこですか、香樹様？」

「教えないならあなたを殺します」

殺す？ハハッ、面白い。

「やれるならやってみろ、もっとも…」

影から斬刀・鈍を取り出し、新技『零砲』で男たちの内の半分の首を刎ねる。

「できればの話だな」

次の瞬間には全員の首がとんでいた。

『零砲』の仕組みは簡単。零閃の斬撃に気を載せて音速で放つ。そして斬撃とともに飛んだ気が相手を切断する。

ふと周りを見渡すと、男たちがいたところの後ろだけだ。いぶ木が切れている。

どうやら貫通したらしい。使用時は斬魔剣・弐の太刀と併用したほうがよさそうだ。

また今度射程を計ってみよう。

しかし、人を殺したというのに一切罪悪感を感じない。

どうやら俺は狂っているらしい。

そつだな、殺人鬼なんだし、裏では零崎を名乗ることにしようか。名前から1文字取るうにも、あまりいい案が思い浮かばない。こつなつたら

近衛香樹…

香樹…

樹…

森…

そつだ、緑だ、緑にしよう。

俺の裏での名前は零崎緑識（せろさきりよくし）にしよう。

そう思いながら、後ろに人の気配がしたので構える。

しかし、でできたのは…

「これをやったのはお前か？香樹」

父親だった。

（side out）

（詠春side）

山で遊んでいたはずの木乃香が屋敷に帰ってきた。しかし、一緒だったはずの香樹がいない。

木乃香に話を聞くと、突然香樹が家に帰るようにつららしい。

あの子は裏を知っている。しかも自身が魔眼持ちだ。

木乃香より魔力は低いが、気の量が膨大過ぎる。

そんな子が木乃香を突然帰らせた。つまり、敵がいたということだ

ろっ。

そう考えた私は、香樹がいる場所を木乃香から聞きだし、急いで香樹の元へ向かった。

しかし、私が見たのは首のない死体10体の中で考え事をしている香樹の姿だった。

無事なのか確認しようと近寄ると、突然香樹が構えながら振り返った。

「これをやったのはお前か？香樹」

私だと認識すると、警戒を解いたようだ。構えを解いている。

「そうだけど、それがどうかした？」

＼side out＼

＼香樹side＼

「そうだけど、それがどうかした？」

「お前は怪我はないな？」

なぜそんなことを聞くのだろう。返り血は一切浴びない距離で切ったはずだ。

「よかった…」

そう言いながら父さんは俺のことを抱きしめてきた。

「ねえ、怖くないの？俺どうやら殺人鬼みたいなんだけど」

「お前は私の子だ。そんなことはどうでもいい。殺人鬼だろうと関係ない」

ああ、やっぱりこの父親にはかなわない。

俺が二重聖人の身体能力や魔眼について話した時もこうして優しくしてくれた。

「ねえ、父さん」

「ん、何だ？」

「俺を鍛えてくれない？」

「もちろんだ」

そして俺の修業が始まった。

第3話（後書き）

ご感想・ご指摘お待ちしております。ただ罵倒はお控えください。

零砲はワンピースに出てくる技『煩惱砲』から斬撃飛ばせば面白くない？と思って作ってみました。

これからもよろしくお願いします。

第4話（前書き）

PV10000達成しました！みなさんこんな駄作を読んでいただ
いてありがとうございます！

ではござ

第4話

どうも、近衛香樹だ。

前回、父さんとの稽古をすることになったんだが、はなから神鳴流がすべて使える俺は模擬戦しかやることがなかった。でもやっぱり父さんも元英雄。聖人の身体能力に平然と拮抗してくる。てゆうか俺初めて零閃はじかれたんだけど！？なんか零閃使ったら「お前もバグか…」とか遠い目してたけどあなたも十分バグだからね！？

そんなわけで現在俺は父さんと試合をしております。

「今日はここまで！」

「うーい」

今日も疲れたし、さっさと寝てしまおう…

うん？ここ何処？

「夢の中じゃよ」

そうか、夢の中か。

ってなんであんたここにいんの？神様。

「いやな、そつちにもう一人転生者がいったんじゃが、大戦期に飛んで歴史だいが変えようとしてるみたいで。おぬしにそいつを消してきて欲しいんじゃよ」

まあ、別に問題はないけど…

「いいのか？おぬしこつちの世界から少なくとも10年はいなくなるんじゃぞ？」

歴史改変されて消されるよりはましだ。ちなみに相手の能力は？

「なんか、曲弦系とシャボン玉とかいっておつたのう。ちなみに身体能力はただの人じゃよ。魔力はハンパないがの」

OK、心配する必要がなくなったな。んじゃさっそく飛ばしてくれ。

「消してもおぬしが帰ろうとするまで向こうには残れるからの。帰

るときは帰ると強く念じればよい。それじゃ頼んだぞ〜」

そして俺は意識を失った。

ん、ここは森か？

俺があたりを見渡すと、一通の手紙と包帯が置いてあった。

「なぜ手紙？」

読んでみるか…

（これを読んでもということとはちゃんと過去に行ったようじゃな。

現在そこの近くで戦闘になつとるから、さっそく戦に参加したらどうじゃ？

ちなみにそこの包帯は顔を隠すものじゃから、しっかり巻いたほうがいいぞい。

うまくいけば紅き翼とも接触できるかも。それじゃ転生者の件、頼んだぞい。)

やっぱり近くでやってんのか。通りで血の匂いが濃いと思った。

俺は全速力でその匂いの元へ走って行った。

ふむ、互いにいい感じに拮抗してるな。ちょっと乱入するかね。

「さて、零崎を始めてみようじゃないか」
パーティの幕開けだ。

あゝあ、呆気ねえなあ。こいつら零砲だけでおわっちまった。
どっかに齒ごたえのあるやついないかねえ。

side out

ナギside

よお、俺はナギ！人呼んで千の呪文サウザントマスターの男だ！

今、魔法世界の大戦に仲間集めて「紅き翼」として参加してるんだが、敵が弱え！

スパッ！！

そんなこと考えてたら、突然周りの兵士たちの体から血が噴き出した。

「なつ、今のは太刀音！？いったいどこから！？」

仲間の剣士・詠春も驚いてる。

すげえ、きれいに一直線に切れてやがる…

俺たちがその斬撃の発生源に行ったとき、立っていたのは返り血にまみれた子供だった…

〈side out〉

〈香樹side〉

「零崎を終わらせてみようじゃないか」

おお、綺麗に片付いたね。

「おい！」

あ、まだ生き残りがいたの？

よし、殺そう。

「零閃」

「まてっ！」

ほう、俺の居合止めたか。
つて、コレひよっとして…

「お前何もんだ？」

紅き翼じゃねーかよオイ！てことは止めたのは父さんか！

「なに、ただの殺人鬼さ」

「名前は？」

「人に聞くときはまず自分から名乗りやがれ」

「俺はナギ・スプリングフィールド！千の呪文の男だ！」

「俺は零崎緑識だ」

「なあ、緑識！お前俺たちと一緒にこねえか！？」

「こらナギ！お前何を突然誘っているのじゃ！」

「人殺せるんだったらいいぜ。人じゃなくてもとりあえず殺せれば

いい」

「物騒だな。まあいい、よろしくな！」

こうして俺は紅き翼として戦うことになった。

第4話（後書き）

感想&指摘お待ちしております。罵倒はお控えください。

なんか錬金術の影が薄い…

どうしよっ…

第5話（前書き）

タケ様、ゼロ様、ダブルクエスチョン様、感想ありがとうございます！

今回も相変わらずの駄文でございます。

ではござ

第5話

ども、近衛香樹もとい零崎緑識だ。

紅き翼に入ってからひたすらに零砲撃って相手殲滅してたら二つ名
つきました。

味方からは『最速の剣士』やら『神童』とか。

敵からは『見えざる斬撃』やら『回避不能』やら『包帯巻いた切り
裂きジャック』やら『ちよ、あいつ障壁貫通してくるんですけど！
？』など…

剣だけで錬金術は？とおもうだろ？

実はこつち来てから物の作製にしか使ってないんだわ。おかげで発
火布を出す機会がない。誰か俺の斬撃防げるような骨のあるやつい
ねえのかよ…

あ、仲間にフィリウス・ゼクトつーガキの不老者がいるんだが、
そいつの使える魔法全部魔眼で解析・自分で使えるようにしました。
もう一人アルビレオ・イマとかいう重力魔法使いがいたのでそちら
もおいしくいただきました。

ちなみに魔眼の性能についてと身体能力について教えたら「こいつ
もバグか…」などと遠い目していわれた。

まあそんなもんは置いといて、現在みんなで鍋をやっております。

「ちよ、ナギ！何先に肉入れてんだよ！」

「いいじゃねえかよ。うまいもんから食ったって」

「トカゲの肉もうまいのかのう…」

「詠春、知っていますよ。あなたのような人を日本では鍋将「奉行だからな？」なんて邪魔するんですか、緑識…」

くく、いじりたかったんだよね！いつもこいつ弄る側だから！

「姫子ちゃんにも食わせてやりたいな…」

「あ？姫子ちゃんってオスティアのあいつか？」

「その戦なんだが…、どうにも不自然なんだよな…」

「ま、俺はとりあえず生き物切り殺せれば万々歳だからな」

「お前は物騒なんだよ！」

あ、神に消すよう言われた転生者だが、いまだに見つかからない。たまたま戦場に現れてはシャボンと糸で周りの敵を連合・帝国関係なく殺してるみたいだが…

て、そんな考え事してたら飛んできた大剣が鍋に直撃。具が空中を舞っていたので肉を中心にあらかた確保。でも詠春に鍋が…

「食事中失礼！俺は傭兵のジャック・ラカン！いつちよ殺ろうぜ！」

「フフ、食べ物に粗末にするやつは…」

おお、だいぶ詠春瞬動早いな！

「斬る」

「おおっ！」

あのラカンとかいうやつ、だいぶ強いな。詠春の斬撃全部避けてやがる。

「情報その1、真面目剣士はお色気によええ！」

あ、詠春がお色気でやられた。

「んじゃ俺が行きますか…」

そう言いつつ小手調べに零砲を放つ。

「うわっち！」

「お、やっぱりかわすか」

「情報その2、包帯のガキ。特徴なしの情報なし！」

「それ情報っていわねえだろ」

ふむ、斬撃だけじゃ埒があかねえな…

なら、

「新技と行こうか」

とか言いつつ実は錬金術を使うだけなだけどき。ちなみに焰。

「お、何だなんだ？」

「消し飛べ」

そう言いつつ俺は手袋を装着、手を合わせてからフィンガースナックでラカンのところへピンポイントで爆発を引き起こす。

「」「」「」

「あ、やりすぎたか？」

「あぶねえじゃねえかこの野郎！」

こわっ！あれ食らって生きてるとかどんなバグだよ！魔力だなんだ使ってるわけでもないし障壁内でもお構いなしの爆撃だぞ！？

「もういいや、あんた相手にしてたら萎えたわ。おいナギ！」

「なんだよ緑識？」

「お前代われ。こいつなかなか骨があるぞ」

「おっけ、ならやるぜ！」

うし、これで無駄に疲れなくて済む。

「あの〜、緑識？」

「何だよアル？」

「あの爆発は一体…。どうやら詠唱もしてないみたいですし…。」

「あああれ。錬金術って言ってな。空気中の成分使って爆発引き起こしたまでだ」

「それはむしろにも使えるのかのう」

「いんや無理だろ。あれはほぼ俺の固有技術、ほかのやつに教えるつもりもねえ」

「そうか…」

結局13時間も戦い続けたラカンとナギは、なんだかんだで仲良くなり、ラカンが紅き翼に入った。

くく数か月後くく

よお、零崎緑識だ。

今、俺たちは『グレート・ブリッジ奪還作戦』とやらに参加するために移動している。

なんか、当初こっちが使つてるときは敵に奪われるなんてことは考えもしなかったみたいだが、いざ敵に回るとここまで強いとは思わなかったそうさ。で、現在辺境で休暇中だった俺たちが駆り出されている。

「お、見えてきたぜ」

おお、もう始めてやがったか。ならさっさと参戦しようぜ。

「てめえら、行くぞ！」

到着！さてさて、やっぱり帝国に押されてるか。

「では、零崎を始めてみようじゃないか！」

さあ、楽しいパーティの始まりだ。

「零砲」

俺の斬撃で数キロにわたって敵の首が飛ぶ。

他のやつも暴れに暴れているみたいだ。

なんか突如として現れたシャボン玉を一応すべて割っておく。

ん？シャボン玉？

「てめえが神の言っていた転生者か」

（side out）

（転生者side）

俺がこの世界に転生して早十数年。やっとグレート・ブリッジまで話が進んだ。

にしても、紅き翼の『見えざる斬撃』って誰だよ？詠春じゃないだろっし…

そんなことを考えながら、俺はあいさつ代わりにシャボン玉をあたりにまき散らした。

でも、ばらまいたはずのシャボン玉が全部割れやがった!？

「てめえが神の言っていた転生者か」

な、なんでこいつ俺の正体を知ってやがる!?

「どつやら間違いなさそうだな」

俺の正体を言い当てた子どもは、さらに俺の両手にあらかじめつけてあった鋼糸を全部切り落としやがった。

「て、てめえ何者だ!？」

「なに、ただの殺人鬼さ」

俺が最後に見たものは、目の前に迫る刀だった…

＼side out＼

＼香樹side＼

お片付けしゅくりよ。

いや、あっけなかったな。雑魚過ぎてどつやって過去かえようとしたのか謎すぎるぜ。

さて、それではパーティを続けようか。

結局作戦は成功、でも容赦なく首跳ねまくってたら周りにメチャクチャ引かれた。俺はただ零崎として楽しんでただけなんだがな…

第5話（後書き）

感想& a m p・指摘お待ちしております。罵倒はお控えください。

あ、作者は一応受験生（中3）で、これからテスト1週間前に入りますのでしばらく更新が途絶えます。ご了承ください。

第6話（前書き）

欲求に負けて書いてしまった…

将様、感想ありがとうございます！

今回はいつもより少し長めです。

第6話

ども、最近零崎緑識の方がしっくりくる近衛香樹だ。

グレート・ブリッジ奪還作戦での功績から、『剣神』とかいう二つ名が増えた。

ガトウとタカミチも仲間になって、現在協力者に会うために本国首都に来てる。

「で？その協力者ってのは誰なんだ？」

「それはこちらにおられる…」

「……マグギル元老院議員！？」

「いや、わしちゃう。そちらにおられるウェスペルタイア王国アリカ王女じゃ」

ここでアリカ姫登場。

うん、綺麗だね。

「アリカ・アナルキア・エンテオフユシアじゃ」

最初にナギが挨拶。

「俺は紅き翼のリーダー、ナギ・スプリングフィールドだ」

「京都神鳴流剣士・青山詠春です」

「フィリウス・ゼクトじゃ」

「アルビレオ・イマです」

「俺は傭兵のジャック・ラカンだ！」

「気安く話しかけるでない下衆が！！」

ラカン嫌われてるね。

「零崎緑識だ」

そんな感じで自己紹介終了。

話し合いも終わり、ナギは王女に見とれてたのでジャックたちにか
らかわれている。反論してるけど、ありゃ絶対惚れたな。

で、「完全なる世界」なる組織の存在がガトウたちによって暴かれ、
戦争を長引かせていることが発覚。

俺たちは肉体担当と頭脳担当に分かれて調査をするようになった。

ん、俺はどっちかって？そりゃ肉体担当だけど？ガトウに咸卦法と
居合拳を見せてもらってからというもの零砲の威力がヤバいこと
になった。咸卦法を使ったら10キロが一発で切れた。問題は横の直

線しか打てないってとこだったんだが、焰の錬金術使えば一発解決。こんな強さで肉体担当じゃない方がおかしい。

なんかナギとアリカ女王が買い物に行つてそのまま敵の本拠地殲滅したことがあったんだが、帰つてきてずっとナギは詠春に怒られてた。はっ、自業自得だな。

でも、その時に見つけてきたらしい証拠によって、メガロメセンブリアMMのナンバー2までが向こう側つてことが発覚。マグギルさんと法務官に頼んで裁判起こそうとしてるんだが…

「法務官は…、来られぬことになった」

「はい…？」

「いや、せつかくの勝ち戦だ。ここで水を差すのはどうかと思つてな…」

はい、偽物ですね。

ナギとアイコンタクトで仕掛けるタイミングを合わせる。

「まで。お前、マグギル元老院議員じゃねえな？何もんだ？」

ナギが魔法で頭を燃やし、俺は零砲を撃つて首を刎ねる。

「な！？おいナギ、緑識も何やってんだよ！」

「詠春、こいつ偽物だぞ？」

と、さっき切つたはずのマグギル元老院議員の幻影が消え、白髪

男が出てきた。

「ふむ、さすがは千の呪文の男と剣神。よくわかったね」
違和感ありありなんだよ。

「さて、零崎を始めてみようじゃないか」

俺たちが白髪に襲い掛かるが敵の仲間によって阻まれる。

と、ここで白髪が連合に俺たちが帝国のスパイだったと連絡。俺たちは反逆者として追われることとなった。

その後、会談途中に襲われ捕まっていたアリカ王女と帝国のデオドラ王女を救出。俺たちのアジトへ連れてきた。

「なんじゃ、ただの掘立小屋ではないか！」

「うるせえ、こちとら現在反逆者の身だぞ？目立ってどっつする」

「ラカンに賛成。目立って攻撃されるのがオチだ」

「なんだ貴様ら！礼儀というものを知らんのか！」

「生憎へラス皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

「同じく。むしろ俺は怖がられると思うんだが？」

「む？貴様らいったい何者なのじゃ？」

「伝説の傭兵剣士ジャック・ラカンだ！」

「零崎緑識だ。好きに呼べ」

「な！こんな子供がああ剣神じゃと！？嘘も大概にせい！」

「ほっほっ、信じられんか。ならば、」

「零砲」

見せたほうが早いだろ。

「い、今の居合の速度…、まさか本物…？」

「いや、だから最初から本物だっていってんじゃん」

「いやじゃ、まだこんなところで死にとうない…（泣）」

「いや殺しはせんって。俺は帝国でいっただんな風に言われてん

だよ」

「ほ、本当に殺さないのじゃな？帝国では、「あいつに会ったら首がとぶ」などと言われておる」

ま、零崎だしな。むしろ褒め言葉だろ。

俺とデオドラ、ラカンで遊んでたらなんかアリカ姫とナギの有名なシーン見逃したらしい。ま、別にいいけどね？

今ふと思い出したけどあの転生者殺したってことは俺もう帰るってのもありかね？

ちょっと試しに神に念話かけてみる。

(なんじゃ？)

(いや、俺もう帰れんのかな〜と思ってな)

(まだ無理じゃよ。ある程度の時間経過が必要なのでな)

(ん〜、分かった。あ、一個質問してもいい？)

(なんじゃの？)

(虚刀流とか全刀流とかって俺使えんの？)

(あれも一応剣術じゃからの。使えるぞい)

(ん、分かった。ありがと。じゃな)

その後、俺たちは悪党どもを叩き潰しながら「完全なる世界」の足取りを追った。

第6話（後書き）

感想・指摘お待ちしております。罵倒はお控えください。

第7話（前書き）

テスト終わったぜやっほい！

相変わらずの駄文です。でもいつもより長い。

ノッポガキ様、タケ様、セフィロス様、ハンター銀様、感想あり
がとつございました！

第7話

さて、やっと敵アジトに到着した零崎緑識こと近衛香樹だ。

敵のアジトは王都オスティア空中王宮最深部『墓守り人の宮殿』だった。

「不気味なほど静かだな、奴ら」

「荒らしの前の静けさってやつだろ」

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊出撃準備完了しました！」

セラスまだ若いね。

「ナギ殿、あの…」

「ん、何だ？」

「さ、サインいただけないでしょうか？」

「おう。いいぜ」

「あ、ありがとうございます！」

と、ここでガトウから連絡が入り、正規軍は説得できなかったことが分かった。

「すでにタイムリミットだ」

「ええ。彼らはもう『世界を無に還す』儀式を始めているのです。『黄昏の姫御子』は彼らの手にあるのですから」

「よぉ〜し！んじゃ行くぞて」「まあ待て」「んだよ緑識？」

「いや、久々に全力で雑魚ども消してやろうと思ってな？いいか？」

「おう、さっさと頼むぜ」

許可が出たので、発火布の手袋を手にはめ、両手を合わせる。

「さてさて、それでは零崎を始めてみましょうかねえ！！」

声とともに指を鳴らし、敵陣ど真ん中から外側ギリギリまでを焼き尽くす！

あゝ、やりすぎて兵士も少し吹き飛ばしたか。まあ死にやしねえだろ。

「おつてめえら、さっさと行って来い。俺は湧いてくるのを消し飛ばしてるから行くからよ」

とかいいつつすでに相手1割も残ってないんだけどね。

ん？どうしたセラス？なんでそんなあり得ないものを見るような目してんの？

「どしたよナギ、いかねえのか？」

「な、なに言ってるやがる！行くぞてめえら！」

「「「「お、おう！」「「「「

（side out）

（セラスside）

零崎緑識。世界最強との呼び声高い剣士。

初めてその姿を目にしたときは目を疑った。

何しろその正体は10に届くかという子供。

目以外の顔を覆う包帯など普通ではない点もあったが、こんな子供があつた。『剣神』だとは信じられなかった。

そんな方が全力を出すという。

突然膨れ上がる殺気。あまりに強烈過ぎて、失神しないようにするだけで精一杯だ。

腰に刀はすでに差してあるので、もちろんあの『見えざる斬撃』とも言われた由来の居合だろう。

と思つたら、突然手に魔法陣？の書いてある手袋をはめた。

そして両手を合わせるとともに生まれる光。

「それでは零崎を始めてみましょうかねえ！」

掛け声とともに突然指を鳴らす。その音とともに敵の方から爆炎が。

火が消えた後私が見たのは、ほぼ全滅した敵の姿だった。

side out

香樹side

「うっし終了！」

いや、数が多くてめんどくさかった！

ん、なにしたかってか？

湧いてくるところを無理やりつぶしたただけけど？

んじゃ、ナギたちのところへ向かいますかね。

ナギたちのところに到着！

「ふふ、見事……。理不尽なまでの強さだ……」

「黄昏の姫御子はどこにいる？」

おお、終わってましたか。てことは…

「ふふ、まだ僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

まずい！殲滅眼発動！ナギに向かって放たれる魔法を食う！

「全てを喰らい…」

「そして放つ！」

ふむ、全部身体強化に回したけどだいぶ上がったな。これなら亜光速行けんじゃないか？

つて、ほかのやつらにも魔法放つてやがる！吸収し切れねえ！

「いかん！最強防護！」

ゼクトが障壁を張るも虚しく、俺とナギ以外のやつに魔法が当たる。

宮殿の奥へと消えていく造物主。ライフメーカー

「待ててめえ！」

追いかけてよとするナギ。

「待ちなさい、ナギ！」

「止めんなアル。俺も行くさ。」

「緑識！」

「二人だけじゃ無理だ！」

「わしも行こう。傷も浅いしの」

「ゼクトまで！」

「待てナギ！あれはヤバい！ここは体制を整えてだな…」

「何だよろしくねえなジャック。俺は千の呪文の男だぞ（サウザン
トマスター）だぜ？」

「その上に殺人鬼までいるんだ。まず負けねえさ」

「よう造物主。この戦争のケリつけに来てやったぞ！」

「ふふ、面白い。ここで終わりにするでしょう！」

造物主から放たれる魔法。魔眼全開放中の俺はその魔法を吸収する。

その間にナギとゼクトが詠唱終了。自身の最強の魔法を放つ。

しかし、その魔法は造物主の障壁の前に防がれる。

それでも造物主に一瞬の隙をつくることには成功する。

そう、一瞬。しかし、それで十分だった。

「その四肢もらうぞ造物主！零砲！連射・四発！」

零砲で奴の四肢の死の線を切り裂く。

「ぐあ！ふ、ふふふ、いいだろう、私を倒すか人間！だが忘れるな。全てを満たす解はない。いずれ貴様らにも絶望の「うるせえよさつきからごちゃごちゃと！」ん？」

「それでも！あきらめねえのが！人間つてもんだらうが！！！」

ナギの魔力のこもった拳が造物主にあたり、造物主は消えていった。

しかし、儀式はすでに発動しており、アリカ王女たちが大規模封印術式を発動。儀式は封印したが、代償としてオスティアは崩落。アリカ王女はこの時元老院につかまり、父王殺し、さらには今回の戦争における元老院の罪を全てなすりつけられ、投獄。そして2年後に処刑が確定した。

そして、2年後。

俺はこの2年ただひたすらに賞金稼いだり、完全なる世界の残党を狩ってた。おかげで5キロぐらいなら斬魔剣・弐の太刀使った零砲で切れるようになった。色々バリエーションというか斬撃の形状が増え、今なら居合で死の点突けるぜ。

そうそう、アリカ姫の処刑が10日後に決まったそうだ。

で、今は隠れ家に集合中。

「おい、詠春。このドアホウはまだうじうじしてんのか？」

「ああ。こいつらしくもない」

よし、ならば。

「おいナギ、てめえにや失望したよ！好きな女の一人も救えなくて何が最強の魔法使いだ！ただのチキン野郎じゃねえかよオ！！」

「んだと緑識！お前に何がわかる！」

「ああ、分からねえよ！でもな、自分を押し殺したって後悔しか生まれないんだよ！もつと自分に素直に生きやがれ！」

「自分に素直に、か…」

「で？結局どうするんだ？われらが紅き翼のリーダーさん？」

「よし……。行くぞてめえら！」

＼side out＼

＼アリカside＼

「ではこれより、今回の戦争の重罪人、アリカ女王の処刑を行う！」

ここはケルベラス無限監獄。足元の谷には大量の魔獣がうろついている。

「さつさと歩かんか！」

「わかっておるわ！気安く触るな下衆が！」

谷に向かって1歩ずつ踏み出していく。落ちれば最後、魔力も気も使えないこの環境ではまず助からん。

妾が最後に思うのは、この2年思い続けた男の事。

「さらばじゃ、ナギ…」

妾は谷に身を投げた。

〈side out〉

〈第三者side〉

「これでこの戦争で死んでいった者たちも報われよう…」

「よおーし！こんなもんだろ！」

突如元老院議員の頭をつかむ兵士。

「な、貴様！一体何者だ！」

「おし、コレ録画だよな？生放送とかしてないよな？ならよし。い

いか、おっさん。ここで録画は終わりだ。これから先の事はすべて『なかったこと』になる。理解したか？」

「き、貴様は！」

「ふんっ！」

声とともにはじけ飛ぶ鎧。そこに姿を現したのは…

「千の刃の男…、ジャック・ラカン!？」

「俺だけじゃねえぞ？周り見ても」

「な、ガトウ!？」

「青山詠春だと!？」

「アルビレオ・イマまで!？」

「ではまさか…」

「アリカ女王なら今頃ナギといちゃついでんだろ」

「し、しかしいくら千の呪文の男でもあそこからは…」

「馬鹿だろお前ら。もう一人うちのメンツがないのに気づけよ」

「け、剣神か！」

「それでも無駄なこと!たとえ剣神でもあんな場所を生き残れるは

「ずが…」

「ハハッ、魔力と気が使えない？だからどうした？あいつは」

「化け物だぜ？」

「side out」

「香樹side」

「現在ナギがアリカ女王を拾ってプロポーズしてるね。俺はその横で…」

「てめえら邪魔だ！」

魔獣を錬金術で焼いたり、斬刀で切り刻んだりしてる。いや、人の告白邪魔するほどたちの悪いもんはないだろ。本音を言えばナギのやつがうらやま…って、違う違う。とりあえずお前ら邪魔だからな？魔獣ども。

で、なんかイラつときたので初めて紅蓮の錬金術使用。もちろん焰と同時だけどな。

な、なんかやばい気がするんですが…

「終わっちゃった…」

感想。コレ二つ併用は自重すべき。強すぎる。

今にも谷が崩れそうだぜ。

で、まだ桃色の空気醸し出してる二人はほおっておいて、ラカンたちのところまで戻った。

第7話（後書き）

ご感想・ご指摘お待ちしております。ただ罵倒はお控えください。

テスト終わってアクセス解析見ましたら、

PV45000

ユニーク10000

突破しました！初めて見たときは目を疑いましたね。始めは「10人もくればいいや」なんて思ってたんですが…

とにかくみなさんありがとうございました！
これからもこの小説をよろしく願います！

第8話（前書き）

相変わらずの駄文です。

恭輝様、t h e p様感想ありがとうございます！

今回は前回よりも長くなっております。

テスト終わったらキーを打つ指が止まらない…

9 / 2 5 少し加筆致しました。

第8話

どうも、零崎緑識こと近衛香樹だ。

アリカさん（もう国ないし）とナギの婚前旅行ってことで京都に行くことになりました。

でもなぜか紅き翼メンバー勢揃い。あれ？これ婚前旅行だよな？な
んでみんないる訳？いや、詠春とかは故郷だからいいとして。まあ
俺が知ったことじゃないんだけどな。

京都に来たんでせっかくだから清水寺とか名所回ってから詠春の家
に行くことに。

観光中はアスナはずっとガトウにくつついてた。

あ、アスナはちゃんと京都に来る前に回収したよ？どうやら顔の包
帯で怖がられてるっぽい。

「ただ今戻りました」

久々の実家だね。俺まだ生まれてないけど。

で、いつの間にか宴会に移行。みんなべろんべろんに酔ってます。
俺はもちろん飲んでないよ？飲むつもりもない。詠春とかはだいぶ
ひどいな。すでに潰れてる。

「た、大変です！」

なんか大慌てでこっちに向かってくる人がいると思ったら、どうやらスクナが復活したらしい。で、酔ったナギとかラカンとかが地形を変えながらいたぶる。うん、見ててだんだんスクナがかわいそうになってきたよ。

で、おとなしくなったスクナは封印。改めてみんな飲み直し始めた。

みんなの飲んでる風景を見て思ったこと。

「ガトウ、日本酒似合いすぎだろ…」

翌日。

みんなバラバラになって観光しに行った。俺はというと…

「なんで俺の家でそこまでくつろげるんだ緑識」

「い〜じゃん別に」

実家でくつろいでます。まあ、今日でみんなと別れて全国放浪するつもりではあるんだが。

あ、ちなみに今の俺は買ってきた生八つ橋と緑茶をむさぼりながら縁側に寝転がってます。

「なあ詠春？」

「ん、何だ？」

「いや、お前、将来生まれる子供が男だったら香樹って名前付けるよ」

「なんでだ？」

「いや、ちょっとな。というより絶対そうなると思うぜ？」

「どづいつことだ？根拠は？」

「いやなに、ただの勘だよ。あ、そうそう。俺今日これから旅に出ながらゆっくり消えるつもりだから」

「もう行くのか。早くないか？」

「何、俺はこっち生まれだがあまりじっくりぶらぶらするってのはしたことがなかったからな。あ、そうだそうだ、お前に生まれるはずの男の子だけど、10年ぐらい失踪してもちゃんと生きて帰ってくるから安心しとけ」

「なんでお前がそんなこと言っただ？…！！まさかお前は…！！」

「んじゃね〜」

さて、あとは帰れる日までじっくり時間つぶしますか。

帰ったら木乃香と刹那に怒られるんだろっなあ…

1発ぐらいは殴られてやるか。

キングクリームゾン！！！！

さてやっとこここの時代に来てから10年経った。ナギたちと別れてからは魔法世界で見たことよって作れるようになったダイオラ

マ魔法球の中で修業してた。ちなみに倍速はなし。木乃香たちに会う時に成長し過ぎてても困るからな。

さて…

(神様。いる？)

(ふおっ！な、何じゃおぬしか…)

(どうしたんだ？)

(いや、ただ寝ておっただけじゃ。で、今日はなんじゃ？)

(いや、そろそろ帰れるんだろ？)

(ちょっと待つとれ…ふむ、これなら帰れるの。さっそく送るのか？)

(ああ、頼む。できれば場所は実家の前で)

(あいわかった。では、行くぞ！)

その声とともに、俺は光に包まれた。

到着！

いや、久々の実家だね。なんかデジャブった感じがしないでもないけど。

「ちわす」

あ、顔の包帯はまだ外さないよ？詠春を驚かせたいからさ。

「零崎様！いらっしやいませ、本日はどういったご用件で？」

「いや、今詠春っている？久々に日本帰ってきたから会おうと思っ
てさ」

「長なら現在庭で稽古中のはずです」

「ん、あんがと」

というわけで庭へレッツゴー。

「やっってるね、詠春」

「緑識！久しぶりだな！そうだ、お前に聞きたいことが…」

「その話は後だ、とりあえずお前の部屋へ行こう」

「で、聞きたいことってのは？」

詠春の部屋についてさっそく聞いてみた。

「お前

香樹だろ？」

「！！おおっ、なんでそうなった？根拠は？」

「いや、お前の最後の言葉通りになったってのもあるが、お前の零砲あるだろ？あれとまったく同じ技を香樹が放ってたんでな」

「クク、正解だよ。では改めて、ただいま父さん」

そう言いながら俺はこの10年1度も外さなかった包帯を外す。にしたってやっぱりあそこまで言うとはれるか。

「やっぱりか……。お帰り、香樹」

「あ、今木乃香と刹那は？」

「あの二人なら今麻帆良だ」

「ふん、なら俺もこれから麻帆良に行くから。根回しよろしく」

「は？」

「んじゃそういってどで〜」

「失礼いたしました…」

あ、家の人に見つかった。しかも包帯つけてねえよ。終わったなこりゃ。

「香樹様!？」

「「「「「「「「「「「何!？」「「「「「「「「「「

ちよ、みんな集まりすぎだつて!

「香樹様、今までどこにいらしたのですか!？」

「お嬢様と長がどれだけ心配していたか…」

「けがなどはありませんか!？」

「とにかくご無事でよかったです!！」

結局もみくちやにされた俺は、その日1晩泊まっていくことに。

みんなが宴会を開いてくれたんだが、俺は途中で退席してさっさと寝ることにする。

翌日。

家の人のどんちゃん騒ぎの跡がひどい。みんな酔いつぶれてる。

「んじゃ、行くわ父さん」

「ああ、行って来い」

めざせ麻帆良！

とか言っても聖人の身体能力使えばすぐ着くんだけどな。で、現在駅前。

確かここに迎えが来るはずなんだが…

あ、顔に包帯は巻いてあるよ？なんか最近これじゃないと落ち着かないんだよね。顔さらしてるとなんか不安になる。

「緑識さん！」

ん、来たか…、あ？ありやタカミチか？

「老けたなタカミチ」

「言わないで下さいよ、これでも気にしてるんですから。ところで、今日来ると言っていた詠春さんの息子さんはどこですか？」

やっぱりわかんねえよなそりゃ。普通俺と同一人物なんて思いもしない。

「俺だよタカミチ。改めて自己紹介だ」

包帯を外す。おお、目が点になってるよ、リアルで初めてみたよ。

「近衛香樹だ。以後よろしく」

「あ、はい、こちらこそって……ええ！？な、なにがどうなって…！？」

「俺と緑識は同一人物だよ。簡単に言うところとちょっとした実験に失敗してな。過去に飛ばされたわけ」

「は、はあ……」

「ま、いいや。とにかく爺のところに行くぞ」

「あ、はい！」

「なあ、なんでさつきから女子が多いわけ？」

「学園長室が女子中等部にあるんですよ」

「あ、女子で思い出したわ。アスナは？」

「師匠が死んだときに記憶を封印したんですが…」

「そっか、ガトウは死んだか…。でも1つ言っておく、お前のそれは悪手だ」

「何ですか！あの子が覚えていても辛いだけ…」

「馬鹿。人間生きてりや必ず身近な人との別れは来る。アスナはそれが早かった。ただそれだけだ。それに記憶もあいつの一部だぞ？それを封印したらあいつは、元のアスナは死んじまうんだよ。それにアスナは自分から記憶を封印していったのか？」

「い、いえ…」

「だろ？そりゃお前らは望まれてもいないのにいらんお節介を焼き

過ぎたってことだ。お前らのそれは偽善ともよべねえ、ただの善意の押しつけだよ」

「……………」

ありゃ、黙っちまったか。

「まあいい。あいつが魔法に関わった時にその封印を解けばいい。もちろんあいつに封印の事伝えて、そのうえで希望するならの話だが」

学園長室到着！

じゃ、初めの挨拶として…

ドアを蹴り破る！

「おいこそ爺、いるか？」

「フオオ！？な、何じゃ香樹か…」

「父さんから連絡は？」

「ああ、すっかり来ておるよ。大戦の英雄と同一人物というのはさすがに驚いたがの」

「なら文句はねえ、ちなみに通うのは香樹で行くからな？」

「あいわかった。ちなみに通うのは女子中じゃよ。共学化のテスト

ケースとでもいえば何とかなる」

「まったく、なんで俺が女子中に…。ま、木乃香とかいるからいいけどよ」

「そう言ってくれると助かるわい。あ、夜の警備なんじゃが…」

「条件が二つ」

「何じゃ？」

「森のかなり奥地、実際は俺がやるから純和風の一軒家建てさせる。後、警備は零崎でやるからな？」

「ふむ、それぐらいなら大丈夫じゃよ。ちなみに給料は…」

「普通の10倍で」

「ふお！？…ま、まあ何とかしよう」

「交渉成立だな。ちなみに担任は？」

「ああ、タカミチ君じゃよ。クラスは2-Aじゃ」

「あいよ。それじゃタカミチ、俺を教室まで連れてけ」

「わかりました」

ふむ、多少は回復したらしいな。

「あ、そうそう」

「なんだよくそ爺？」

「今夜0時に世界樹前まで来てくれんかの？」

「顔合わせか？わかった、行ってやるよ」

「なあタカミチ、このクラスってこんなのはっかなのか？」
扉に挟んである黒板消しを見ながらタカミチに聞いてみた。

「うん、みんな元気ない子だよ？」

「うし、俺先入ってもいい？」

あ、既に顔の包帯は外したよ？なんかだんだんイライラしてきてるけどね。

「いいけど…」

担任の許可が出たのでさっさと入る。

まずは黒板消しを片手で掴み、足元の紐を足刀で斬る。と、横から飛んできた矢はすべて黒板消しに当て、頭の上から落ちてきたバケツはすっかり中の水がこぼれないようにキャッチ。

「はい仕掛けたやつ自首すればやり返さないよ？早く出てくれば

」？

とかいいつつ教室にかゝり弱めた殺意を放ってみる。おお、武闘派の反応が凄い。それ以外は顔青ざめてんな。

「「「すいませんでした！」「」」

「はい、許す！あ、ちなみに俺は転入生の近衛香樹だよ」「こゝくん！！」「ぼはあ！」

おうおう、いきなり頭の黒いロケットが突っ込んできたよ。まあ、木乃香なんだけどね？なんか刹那も固まってるし。

「こゝくん、今までどこ行ってたんや！？うちもせつちゃんも心配したんやえ！？」

はうっ！な、涙目だと！や、ヤバい！可愛すぎる！罪悪感が凄い！
「ご、ごめんな木乃香。心配かけさせて。とりあえず今は席戻ってくれるか？」

「むう、あとで全部ちゃんと教えてな？」

「分かったって」

ひとまず木乃香を元の席に戻すことに成功。

「あ、そうだタカミ…じゃなかった。高畑先生、この時間先生の授業？」

「う、うん…」

「じゃあさ、どうせだから質問タイムにでもすれば？本音としては

俺が休み時間を削りたくないってのもあるんだが…」

「はいはい！質問ならこの朝倉和美にお任せあれ！」

「じゃ、じゃあよろしく…」

「まずはなんでここに？」

「くそじ…学園長が無理やりな」

「……………あ……………」

これで納得されるって何やってんだあのぬらりひょんは…

「次行ってみよう！身長・体重などその他もろもろお願いします！」

「身長175、体重は不明、趣味は散歩・鍛錬・読書、特技としては色々ありすぎるんだが、家事ぐらいなもんかね」

「では最後に！ここで気になるのは誰ですか！？」

「木乃香・刹那だな。木乃香は双子、刹那とは幼馴染だ」

「でも双子という割には似てませんよね！？」

「二卵性だからな」

質問終了。意外と簡単な質問だったから楽だった。で、いい加減落ち着かなくなってきたので顔に包帯を巻く。

「なぜに包帯!？」

おおう、やっぱりし気になるか。

「いや、一時期コレ顔にずっと巻いてたことがあるんだけどさ、もう外してると落ち着かなくなってる」

「それじゃ、香樹君の席は一番後ろのエヴァンジェリンの横に座ってくれるかな」

「はい」

おおう、なんか無愛想だなおい。

(よろしく、闇の福音)

ダーク・エヴァンジェル

念話送ってみたらびっくりしてるね。

(!! 貴様、何者だ?)

(いや、ただのしがない殺人鬼さ。これからよろしく)

(ふん、まあいい。あとでお前、私の家に来い。そこで話そう)

(おおう、分かった)

放課後。

ん？授業？全部サボったけど何か？で、現在屋上で読書中。いや、春は屋外で読書つてのもいいね。

「こゝくん！」「香樹君！」

「ほぶ！？」

黒のロケット今度は2発着弾。正体は刹那と木乃香だ。いいかげん痛いんだけどな？嘘だけど。

「さあ、洗いざらい話してもらいますよ」

「嘘ついたらアカンえ」

ふ、二人とも顔が怖いです…

「わかったって。でも他に用事あんじゃないの？」

「そっやえ。こゝくんの歓迎会に迎えに来たんや」

「お、それじゃそこに向かう間に話すとしよう」

～移動中&説明中～

「…とまあこんな感じかな」

「そんなことがやったんやね…」

うん、嘘に嘘を重ねてその上からさらに嘘を塗りたくったよ？おかげで木乃香は信じてくれたみたいだけど…

「香木君、まさか、裏には…」

刹那にはごまかし切れなかったみたいだな。まあ、過去に行ったなんてのは言っていないからばれてないんだが。

「かわったよ。すでに人殺しも経験済みだ」

「！…！…そうですか……」

「ついたえ」

入ると同時にクラツカーの音が響く。

「いらっしゃい！」

「ささ、主役はこっちだよ！」

なんか真ん中に連れてこられた。

ああ、なんかこれこの時代帰ってきたときの実家の宴会と同じ感覚がする…

で、携帯奪われ、連絡先を無理やり交換させられ、やっと解放され

た。

さて、むかうはエヴァの家だぜ！

第8話（後書き）

ご感想&ご指摘お待ちしております。ただ罵倒はお控えください。

次回はタカミチフルボツコまで持っていければいいな…

第9話（前書き）

相変わらずの駄文です。それでもよろしい方はどうぞ。

恭輝様、タケ様、ゆや様、がう様感想ありがとうございます！

なんか長くなるにつれてクオリティが低くなってる気がする…

第9話

さて、最近むしろ近衛香樹の方の名前の反応が薄くなってきた零崎緑識だ。

うん、むしろコレ本名でよくね？嘘だけどさ。さすがに零崎が本名はいいや。

で、現在は今日呼ばれたエヴァの家に向かっている。

場所は爺から聞き出したし、速攻で着いた。うん、やっぱりログハウスってなんかいいよね。

さっさと呼び鈴鳴らしてみた。

(ピンポン！)

「はい、どちら様ですか？」

あ、そういう茶々丸ってエヴァの従者だったか。

「エヴァンジェリンに呼ばれたんで来てみた。あがっていい？」

「どうぞ。マスターがお待ちです」

と、茶々丸が入れてくれたのでさっさと入る。

なんか随分とファンシーだなおい…

で、茶々丸の案内でエヴァのところへ。

「よう、呼ばれたから来てやったぜ。面倒くさいけど」

「な！貴様この私の正体を知ってよくもそんな口を！」

「吠えたって無駄だぞ、エヴァンジェリン？鬼同士仲良くしようじゃないか」

「何？鬼同士だと？」

「だから、教室で俺があんたに自分の事なんて言ったか覚えてないのか？」

「あ、確か殺人鬼とかいつてたな……」

「そ。それもかなり危ない部類。むしろ人斬ってる快感覚えるね。特に長距離に渡って人の首がきれいとんだときなんか最高」

「何？長距離に渡って人の首がとぶだと？それではまるで大戦の英雄、零崎じゃないか」

「あ、危ないのは気にしないんだね。ま、俺が本人だから？聞いたことない？零崎緑識の特徴」

「確か、『刀を抜く瞬間を誰も見たことがない剣士』とか、『顔に包帯巻いてて目元以外は顔がわからない』とかいろいろと……ん？顔に包帯？」

「この包帯が証明。ちなみに当時の紅き翼も俺の素顔は知らんよ？」

「ふむ……まあいい、なんでいまだに子供なのかとか聞きたいこともあるが、仮にお前が本当にあの零崎緑識だとしよう。だもしたら私に何の用だ？」

「いや、うちの馬鹿^{ナギ}がやらかした尻拭い^{ナギ}をと思ってな。その封印、解いてやるよ」

「なるほど、そういうこと…って、なに！？お前、これが解けるのか！？」

「解けるよ。もちろん代価はいらんよ、元はあの馬鹿が悪いんだからな」

というわけで魔眼発動。

エヴァの呪いを視る。

(うーわ、ナギのやつ魔力でゴリ押しし過ぎだろう。もうちよっと考えて掛けるよな)

「さあ、早くと」「うっせえ、今やってる」「…」

(こりや面倒臭いし直死で死の点つくか…)

直死の魔眼発動。呪いの死の点を見る…って、あ？エヴァ自身のと呪いともう1つあるんだが…ああ、学園結界か。ま、こっちは後回しだな。

とりあえず呪いの死の点を指で突く。

「ほい、解けた」

「フ、フハハハハ！これで私は…ん？なぜ魔力が戻らない？呪いは解いたんだろう？」

あ、そういうことか。

「エヴァンジェ」「エヴァでいい」「エヴァ、お前に呪いのほかに魔力

を抑える結界がかかっている。おそらく学園結界だ。どうする？」

「ふん、今なら学園を出れば全盛期まで戻れるんだ。別にいいさ」

「ん、ならいいや。あ、今何時？今夜0時に爺に世界樹前まで呼び出されてるんだが」

「茶々丸、今何時だ？」

「ただ今23時55分です。お急ぎになった方がよろしいかと」

「ん、ありがとう。十分間に合う」

「さっさと行って来い、私は行かないからな」

「分かった。それじゃ！」

さっさと行きますかね！

世界樹到着！

「その新しい警備員というのは誰なんですか！？学園長！」

「ちょ、ちょっと待っとくれ、もうすぐ来るはずじゃから……」

「いや、既にいるんだが……」

おおつ、みなさん殺気がすさまじいね。ま、慣れてるから別にいいけどさ。

「おお、来たか零崎君」

「零崎だと！となるとお前は……じゃなかった、あなたは英雄の零崎緑識様ですか！？」

「そうじゃ、本人だとわしが保障しよう」

「というわけでこれからよろしく。そいじゃかえ「タカミチ君と模擬戦してもらえんかのう」……っち、帰らせる気はないのね……」

「はは、相変わらず面倒くさがりですね」

「ま、タカミチだったらいいけど。そのほかだったら1秒持たせない自信があるね」

「せめてもうちよつと優しくしてくれませんか？そもそもあなたは強すぎるんですよ」

「ま、じゃなきゃ殺人鬼なんて名乗れねえからな。来いよタカミチ、叩きのめしてやる」

「あなたは今回どこまで手を抜くんですか？」

「ん、じゃ、刀は使わないでやるよ」

「とかいつてあの手袋とかやめてくださいよ？本気でかわせませんから」

「大丈夫、あれはナギとかジャックとかあの辺のバグキャラ専用だ。お前じゃ木端微塵だよ」

「なんかそれはそれで戦つてみたい気もするんですがね、やめときます。ちなみに眼は？」

「使つてほしいか？」

「せめてあの万華鏡写輪眼でしたっけ？あれは使わないでくださいよ。それこそ死にます」

「んじゃ輪廻眼だな」

「げっ、あれ使つんですか…」

「おう、さっさと終わらせたいんでな」

あ、周りが会話についてこれてない。いたとしても俺の刀使用禁止

宣言でみんな固まってるな。

「おい、くそ爺。さっさと始めさせる」

「う、うむ…さっきの条件で本当にいいんじゃない？」

「ぐだぐだうるせえよ、俺は無手でも戦える」

「で、では、いざ尋常」…」

タカミチが両手を合わせ、初めから咸卦法を使う。俺が目を見開き、輪廻眼特有の紫の瞳に波紋のようなものを浮かびあがらせる。

「はじめ！」

〈side out〉

〈第三者side〉

「はじめ！」

次の瞬間、香樹が横へ飛ぶ。

「ずいぶん速度あげたじゃねえか、ええ？」

先ほどまで香樹がいた場所には大きなクレーターができていた。

豪殺・居合拳。

タカミチの師、ガトウが使っていた居合拳の中でも特に強力な技である。

「そりゃ、あなた相手に出し惜しみしてられないですよ！」

「クク、なら俺も」

タカミチは香樹の方へ吹き飛んだ。否、引き寄せられた。

輪廻眼・天道。

輪廻眼の能力の一つで、引力・斥力を操る力である。

「さっさと終わらせるぞタカミチ。喜べ、俺が初披露の技使ってるよ。対人初使用だから手加減失敗するかも」

「なっ！ちよ！」

「虚刀流最終奥義・七花八裂！」

直後、タカミチは空を飛んでいた。

side out

刹那side

今日は新しい警備員との顔合わせらしい。
警備員が全員世界樹前に集められている。

一体どんな人なのだろうか…

このちゃんと香樹君に手出しするようなら、この私が斬り捨てる！

「その新しい警備員というのは誰なんですか！？学園長！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、もうすぐ来るはずじゃから…」

「いや、既にいるんだが…」
なっ！いったいいつの間に！

「おお、来たか零崎君」

「零崎だと！となるとお前は…じゃなかった、あなたは英雄の零崎
緑識様ですか！？」

ガンドルフィーニ先生が興奮している。無理はない。いきなり大戦
の英雄、しかもその中でも最強と言われた男が現れたら誰だってそ
うなる。ただ…

「あれ、香樹君…？」

包帯巻いててすごく分かりづらいが、確かに香樹君だ。なぜだ、なぜ香木君が大戦の英雄になっている。

「そうじゃ、本人だとわしが保障しよう」

しかも学園長のお墨付き。あの方は一体この10年で何をしていたのだろうか…

「というわけでこれからよろしく。そいじゃかえ、タカミチ君と模擬戦してもらえんかのう」…っち、帰らせる気はないのね…」

「はは、相変わらず面倒くさがりですね」

「ま、タカミチだったらいいけど。そのほかだったら1秒持たせない自信があるね」

い、1秒持たないって…

一体どれだけ強いのだろうか…

「せめてもうちょっと優しくしてくれませんか？そもそもあなたは強すぎるんですよ」

現学園準最強をもってして強すぎるとは…

「ま、じゃなきゃ殺人鬼なんて名乗れねえからな。来いよタカミチ、叩きのめしてやる」

殺人鬼…？

確かに人は殺したと言っていたが、一人殺しただけでそこまで…？でも戦争の英雄ってことは大量に殺したのか…？

「あなたは今回どこまで手を抜くんですか？」

「ん〜、じゃ、刀は使わないでやるよ」

は？刀を使わない？確か…

「なあ龍宮、確か零崎緑識って『剣神』とか言われた剣士だったはずじゃ…」

こいつは龍宮真名、私の警備のパートナーで傭兵だ。

「刹那のその認識で合ってるよ、当時は帝国からは『あつたら死ぬ』とまで言われたそうだよ」

「そ、そこまで…でも、剣士なんだろう？無手でも戦えるの…」
か？と聞こうと思ったがやめた。4歳の時に香樹君が木をなぎ倒したのを思いだしたから。あれなら無手でも十分戦えるはずだ。

「とかいってあの手袋とかやめてくださいよ？本気でかわせませんから」

「大丈夫、あれはナギとかジャックとかあの辺のバグキャラ専用だ。お前じゃ木端微塵だよ」

対バグ専用って…

どんだけ危険なんですか、それ。

「おい、くそ爺。さつさと始めさせる」

「う、うむ…さっきの条件で本当にいいんじゃない？」

「ぐだぐだうるせえよ、俺は無手でも戦える」

「で、では、いざ尋常に…」

次の瞬間、高畑先生が咸卦法を発動させた。

「いきなり究極技法!？」

周りも驚いている。いきなりあれはやりすぎではないだろうか…

対して香樹君は…

何なんだろう、あの眼は…

前に見せてもらったときは確か五芒星だったはず…

香樹君の目には、見たことのない模様が広がっていた。

「はじめ!」

直後、香樹君が横に移動した。

「龍宮、今何があったかわかるか？」

「たぶん高畑先生の居合拳だろうな。それを緑識さん…いや、香樹君は避けた」

「い、居合拳って確か不可視じゃ…」

「恐らくあの眼だろうな。じゃなければわずかな動きから弾道を見切ったか」

再び戦いに目を戻すと、高畑先生が凄いい勢いで香樹君の方へ引つ張られている。

一体何もしたんだろう。魔法の詠唱などはしていなかったが…

そして、高畑先生が香樹君に触れるというところで香樹君がすさまじい勢いで技を繰り出した。

あれだけの連打を喰らった高畑先生は、空を飛んだ。あれではおそらく気絶しただろう。

side out

香樹side

さて、タカミチも倒したことだし、さつさと帰ることにするかね。ちなみに七花八裂（改）を使わなかったのはそこまで使う必要がなかったからな。なんだったら打撃技混成接続でもよかったんだけどね？

あ、エヴァの呪い解除報告してなかったわ。

「そうそうくそ爺、俺エヴァの呪い解いたからな？」

「フオ！？ま、まあおぬしならいいじゃろう」

「待つてください！あれは悪の魔法使いなんですよ！？」

あゝ、正義馬鹿ってやつですか。うん、うざいね。

「いや、俺からしたらあいつと俺たち英雄は対してやったこと変わらんぞ?」

「なっ!どういう意味ですか!?そんなことはないはずです!」

「いや、両方人殺しであることには変わらないだろ。俺なんかむしろ喜んで人殺すぞ?だって殺人鬼だし。英雄とか言ってたって大量殺戮者には変わらないだろ。むしろエヴァの方がいいやつだろ、自衛でしか殺してないんだぞ?俺たちは戦争とはいえ進んで人殺したんだからな」

「……………」

「やっと黙ったか。じゃ、そういうことで。あ、学園結界は解除してないからな?」

おお、爺とか目が変わったね。別にいいけど。

「じゃ〜な〜」

俺はその場を後にした。

第9話（後書き）

感想&指摘お待ちしております。ただ罵倒はお控えください。

テスト結果オワタ…

第10話(前書き)

相変わらずの駄文&今回は少し短いです。

恭輝様、鈴木爆撃機様、Zin様ご感想ありがとうございます！

ではごっご

第10話

ども、近衛香樹だ。

さて、あの顔合わせから数日たった。家？あれからすぐ建てたよ、錬金術と剣術使いまくったけど。

純和風の一軒家、庭付きという俺の好みドンピシャだったね、自分で建てたから当たり前だけど。ちなみに家の周りに俺の許可なしにはたどり着けないという結界を張った。今のところ来れるのはエヴァ、それと茶々丸とチャチャゼロだけ。タカミチとかもたどり着けない。もちろん学園長の遠見の魔法とかもこの中にいる限り無理。

あ、チャチャゼロはエヴァが呪い解いた後即復活させたらしい。あいつとは気が合う。何せ殺人鬼と殺戮人形だからな。武器も同じ刃物（まあ俺は刀だが）だしね。

で、現在、俺は刹那に目の前で頭を下げられています。

「お願いです！私に剣を教えてください！」

どうしてこうなった…？いや、確かに俺は剣士の頂点だけどさ。

「理由、聞いてもいいか？」

「それは…このちゃんを守るためです！」

ふむ……教えてもいいんだけどさ、こいつ絶対俺と戦闘方法が違うんだよな…

「もう一つ聞くが、お前、居合は使うか？」

「いえ、あまり…」

「んじゃ無理だ。あきらめろ」

そう、俺の剣の主体は居合とその剣速を使って飛ばす斬撃だ。斬撃飛ばしなんかは使えるんだろうが、俺の見えない居合は俺の聖人の身体能力とさらに自分で鍛え続けてきた筋力があって初めて使える技だ。

今の刹那では零閃すら使えない。

「そこを何とか！お願いします！」

なんかこのままだとずっと言ってきそうだな…

こうなったら、条件付けてやるか…

「なら刹那。試験だ」

「試験ですか？」

「ああ、俺がお前の太刀筋見て決める。合否条件はなし。とりあえずひたすら俺に切りかかってこい。手加減するな、奥義の使用も許可する」

「お、奥義まで…？それでは香樹君が…」

「いや、俺の二つ名知ってるか？『剣神』だぞ？お前」
「お前」のときに傷つ

けられてたまるか」

「わ、分かりました」

「うし、なら場所かえんぞ。ついてこい」

「はい…」

てなわけで連れてきましたマイホーム。刹那はびっくりしてたね。で、即俺自作の魔法球（24倍速）の中に入。この中何もないところ（俺の修業結果）と家しかないから殺風景なんだよな…

今はすでに刀を構えて臨戦態勢。ちなみに俺は今回は斬刀ではなく刃が逆についている逆刃刀を使っている。

「さて、始めるとしようか」

「よろしくお願いします！ただ…」

「ん？どしたよ」

「あの、抜かなくていいんですか…?」

「おう、俺は基本居合だからな」

「そ、そうですか…」

「どしたよ、かかってこないのか?」

「いえ……………行きます!」

刹那が瞬歩で踏み込んできた。そしてそのまま上から斬り下ろす。だが、

「遅いぞ」

俺は居合で刹那を吹き飛ばした。もちろん手加減はした、しかしおそらく刹那は俺が今何をしたかわかっていないはずだ。事実驚いた顔をしている。

「どうした?もう終わりか?お前はその程度か?」

「まだです!」

挑発したら案の定乗ってくれたらしい。再びこっちに向かってきた。

「斬岩剣!」

「甘え!」

刹那が繰り出してきた奥義を零閃で弾く。なんで斬鉄閃じゃなかつ

たのか不思議なところだが…

「おらおら、どうした！早くこいよ！」

刹那はどうやら本気で斬りかかっている様だが、遅い。それに…

「どうした？翼使ってもいいんだぞ？」

「…！」

そう、こいつは翼を使っていない。空中から攻めればまだ活路があるかもしれんのに…

「しかし、あれは…」

「ちなみに俺は前に言ったよな？俺も人外だと。それに知ってるやつの前で隠すようなことか？」

「……わかりました。行きます！」

やっと翼を出して向かってきた。まあ…

「意味ないんだがな」

「なっ！」

さっきよりも速度をあげて突っ込んで来た刹那の刀を白刃取りする。まさか見切ると思っていなかったのだろう、確かに普通の人じゃ避けられるかどうかの速度だ。そう、ただの人なら。

でも、俺には魔眼がある。写輪眼を発動させれば、普通の剣速にし

か感じない。そうならばこっちのもの、掴むなんて朝飯前だ。

掴んだ刀の腹を思い切り叩き、態勢を崩したところで剣の柄に居合を入れ、手から叩き落とす。

さて、これであきらめてくれるといいんだけど…

おいおい、なんであきらめねえんだよ、剣士としては剣飛ばされたら終わりだろうが。

俺はよつぽど不思議そうな顔をしていたらしい、向こうから説明してくれた。

「まだ、私は戦えます！」

「……合格だ」

「…えっ？」

「だから、合格だったってんだよ。俺がお前を鍛えてやる、それで満足か？」

「…!!…!!はい!!」

うん、そんな何が何でもあきらめないような目してるやつを見ないわけにはいかんだろう。まだ太刀筋が正直すぎる部分もあるが、これから直していけばいい。こいつは俺が鍛えるんだ、それ相応に化けてもらわなきゃな。まあ、まさか今の段階で俺に魔眼を使わせるとは思わなかったが。

「うし、ひとまず明日からな。とりあえず今日は帰って休め」

「はい!…あの、私との試合の最中に何をしていたんですか?いきなり吹き飛ばされるし、斬りかかったら全部当たる前に弾かれるし、最後なんて突然刀が吹き飛ばされるし…」

「ああ、あれ。ありや全部ただの居合抜きだよ、ちなみに最高速度は今回出してない。そもそも使った刀が刀だからな」

「え、あれ全部居合だったんですか!?ていうか刀が刀って…?」

「俺はいつもの愛刀じゃなくて手加減&不殺用の刀使ったから。こいつは居合に向いてなくてな」

「はい!?!てことは本気はあれよりも速いんですか!?!」

「おう、止めたのは父さんだけだ。あの時はびっくりしたけどな」
もはや何も言えないらしい、一気に黙ってしまった。まあ、俺の刀
見切れる時点ですでにバグだからな…

ひとまず刹那を寮に帰し、俺はいろいろと刹那の修業のメニューを
決めることにした。ひとまず神鳴流を鍛えようか……それともいつ
そのこと零閃覚えさせようか…

第10話（後書き）

感想&指摘お待ちしております。罵倒はお控えください

PV10万突破しました！ありがとうございます！

さて、刹那魔改造フラグ立ててみました。後は誰を魔改造しようか…

戦闘描写難しい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5081w/>

近衛家の魔眼持ちの錬金術師

2011年10月1日20時27分発行